特別支援教育

見通しをもつことに困難さのある生徒が主体的に行動する力を育む指導の工夫
― 障害特性等を踏まえたプランニングノートの活用を通して ―

廿日市市立佐伯中学校　恵木　美智子

研究の要約

本研究は，見通しをもつことに困難さのある，自閉症のある生徒が主体的に行動する力を育むことを目的とする。所属校の自閉症・情緒障害特別支援学級の生徒は，次の活動に備えて，何を，いつまでに，どのような方法と順番で行うとよいかを，具体的に想像し自ら実行する「見通しをもって主体的に行動する力」に課題がある。そこで，文献研究と生徒の実態把握を踏まえ「障害特性等を踏まえたプランニングノート」を作成した。「障害特性等を踏まえたプランニングノート」を活用するよさ及び必然性に気付かせる授業，並びに，日常生活での活用を促す指導・支援を行った結果，対象生徒２名の「見通しをもって主体的に行動する力」に向上が見られた。このことから，見通しをもつことに困難さのある生徒に「障害特性等を踏まえたプランニングノート」を活用させれば，「見通しをもって主体的に行動する力」を育むことができることが分かった。

Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成23年）では，キャリア教育の定義を「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育」[1)]と示されている。

また，「キャリア教育は，キャリアが子ども・若者の発達の段階やその発達課題の達成と深くかかわりながら段階を追って発達していくことを踏まえ，幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが必要である。」[2)]と示されている。

さらに，「各学校段階における推進のポイント」において，中学校では，「社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等についてしっかりと考えさせるとともに，目標を立てて計画的に取り組む態度を，体験を通じてその重要性について理解を深めさせつつ育成し，進路の選択・決定へと導くことが重要である。」[3)]と示されている。

所属校では，目標を立てて計画的に取り組む態度などの育成を目指し，生徒に，「プランニングノート」を活用させる指導に取り組んでいる。

通常の学級の生徒は，「プランニングノート」に，「自分の目標・目標に向けてやること・提出物とその期日・家庭学習の時間等」を自ら進んで書き込んでいる。その結果，学習時間が増えたり，忘れ物が減ったり，自分の生活の仕方を振り返って生活リズムを整えたりすることができる生徒が増えつつある。

本学級は自閉症・情緒障害特別支援学級である。生徒は，教室を移動する際に，何をいつまでにしなければならないかが分からず，他の人に声を掛けてもらわないと行動しなかったり，遅刻したりするなど，次の活動に向けて主体的に見通しをもって行動することが難しい。また，事前に指示があったにもにもかかわらず，係，委員会活動に行くことを忘れてしまったり，持参物を指示され，連絡黒板に示されているにもかかわらず忘れてしまったりする。

これは，「プランニングノート」に示された教科等の時間に向けて，今，何を，どういう順番でやるべきか，状況の認識ができなかったり，見通しがもてなかったり，忘れたりするからであると考える。

霜田浩信（2018）は，自閉症の特性として，状況の認識が苦手であったり，周囲からの情報を適切に捉えることが，苦手であったりする。また，予定やスケジュールが変更された場合には，なぜ変更されたのか，理由が分からず，納得できず混乱してしまうことがあると述べている。

これらのことから，見通しをもつことに困難さのある生徒が主体的に行動するためには，自閉症の特性を踏まえた指導・支援を工夫することが重要であると考え，本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

１　見通しをもって主体的に行動することと自閉症の特性との関連

(1) 見通しをもつことの困難

三苫由紀雄（2014）は，「自閉症には，目に見えないものについて考える，経験したことから次の活動を予想する，いくつかの情報から学習や活動の展開を予想する，経験したことを人と共有する等が困難である。いずれも想像力の困難に関係することである。」[4] と述べている。

J.A.ナグリエリ・E.B. ピカリング(2010)は，「プランニングは,どのような課題なのかを判断したり，課題に取り組む方法を選んだり，工夫したり，進行状況を確認したり，必要な場合には新しい方略を生み出したりする認知処理過程」[5] と述べている。

このプランニング能力について，安住ゆう子（2014）は，ものごとがスムーズにいくような順番を考える，時間配分を考えて計画的に行動する，そのときの状況に応じて優先順位を考えて省略したり延長したりするなど，計画を立て判断してものごとを進めることだと述べている。

これらのことから，次の活動に備えて，何を，いつまでに，どのような方法と順番で行うかといった見通しをもつことは,具体的に想像することであり，自閉症のある生徒には困難であると考える。

(2) 見通しをもって行動する力を育む工夫

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）（平成30年，以下「29年解説自立」とする。）では，見通しをもつことが困難な自閉症のある生徒に対して，予定されているスケジュールや予想される事態や状況等を伝え,行動の仕方を短い文章にして読むようにしたり，適切な例を示したりしながら，場に応じた行動の仕方を身に付けさせていくことが大切である。自分で予定表を書いて確かめたりして，見通しをもって落ち着いて取り組めるように指導することが有効であると示されている。

日本自閉症スペクトラム学会（2005）は，自閉症のある生徒について，認知能力の遅れや言語発達の遅れによって，情報の入力が大幅に制限されるため遭遇した事態の内容や因果関係が理解できず，見通しが立たない不安が生ずるのであるが，こんな場合には，経験させたい内容をスモールステップに刻んで用心深く少しずつ接近させていくと，解決することもあると示している。また,自閉症のある生徒は，環境のもつ刺激や情報の意味付けに，様々な混乱を示すので，その障害や混乱を防ぐために，環境のもつ学習や生活の場の刺激や情報を調整して提供することが大切であり，その際に用いられる基本原理が「視覚的構造化（visual structuring）」といわれるものであると示している。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成20年，以下「特総研20年」とする。)は，構造化について，「場や時間，手順などについて自閉症の児童生徒にわかりやすい構造を作り，見通しを持って自立的に行動できるようにするのである。」[6] と示している。

三苫（2014）は，「指導方法や指導場面の環境に関して有効な方法の一つとして，ＴＥＡＣＣＨプログラムの構造化がある。自閉症のある人は情報の取り方等に困難があるため，今何をするべきか，次にどうなるのか，活動の流れや生活の仕方などをわかりやすくすることで，学習に集中し安心して生活ができるようになる。この支援が構造化である。」[7] と述べている。

霜田浩信（2014）は，自閉症のある生徒の中学生段階において「小学生段階までに行ってきた日常生活のルーティーン化（パターン化）やスケジュールの提示は継続していくが，自分でスケジュールを立てたり，スケジュールの変更に対応したりする経験を積むことが求められる。」[8] と述べている。

これらのことから，自閉症のある生徒の見通しをもって行動する力を育むためには，目に見えない多様な時間や手順をスモールステップで構造化し，視覚化することが有効であると考える。また，適切な例を示しながら自分でスケジュールを立てさせる指導が必要であると考える。

(3) 主体的に行動する力を育む工夫

安住ゆう子・鈴木弦・芳賀亮一・藤村愛・三島節子（2017）は，実現可能な計画を立てたり時間管理をしたりするなどの実行機能を身に付けさせるためには,子供自身が達成しやすい方法,学び方を知り，身に付けることが必要であり，本人にそうすることの大切さや，必要感を意識してもらうことが大切であると述べている。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成23年）は，中学部段階では，目標の実現に向けてのプロセスを自分で組むことができるようにさせたいと示している。まずは，本人にとって身近で短期間に，達成できるような目標を立てさせることから始め，やり遂げたという成功体験をもたせるようにす

ることに重点を置く。その際，数量や行動など具体的に評価しやすい目標を立てさせれば，評価によって自信が生まれ，意欲も高まり，自ら次の目標を設定することにもつながると示している。

「特総研20年」は，自閉症のある生徒は情報のどの部分が必要で，どの部分が不必要なのか判断できず,同時に二つ以上の事柄を意識内に捉えること(複数の情報の同時処理）が難しいと示している。言葉などの聴覚的なものより，視覚的な情報処理の方が得意であると示している。

これらのことから，主体的に行動する力を育むためには，情報を取捨選択して「次の活動に向けての行動を予測することのよさ」，一つずつ情報を捉えて「すばやく無駄なく行動するための順番を工夫するよさ」，情報を視覚化し「忘れないようにするためのメモのよさ」を実感させ，「障害特性等を踏まえたプランニングノート」(以下,「見通しノート」とする。)を活用させることが大切であると考える。また，主体的に行動する力を高めるために，どうしていくべきか振り返らせるというＰＤＣＡサイクルが必要であると考える。

２　「見通しノート」の作成と活用

(1)「見通しノート」の作成

「特総研20年」は，自閉症のある生徒への指導・支援として，繰り返しの学習によって，基礎となる知識を着実に定着させること,聞きながら学ぶより,動作・操作を伴った学習方法をとること，絵やジェスチャー，写真，文字などの方法を用いて伝えること，一つの仕事（指示されたこと）をやり遂げたら次の指示を出すことを挙げている。

三苫（2014）は，「自閉症のある人が学習や活動するための情報として，どこで，いつ，何を，どのくらい・いつまで，どのようなやり方で，終了を理解し次に何をすればいいのか，これら六つの情報が挙げられる。構造化の技法として，物理的構造化，スケジュール，ワークシステム，決まった手順や習慣，視覚的構造化があり，これらについてその人に合う方法を吟味して構造化することである。」[9]と述べている。

本田秀夫（2018）は，自閉症の特性について「粗大運動や微細運動の不器用さなどが挙げられる。」[10]と述べている。

霜田（2018）は，「学習面においても複数の情報を関連づけて捉える難しさを抱える場合には，情報を提示する際に音声言語のみならず視覚的な情報（文字・写真・絵・ワークシート・実物）で提示することや情報をどのように関連付けて捉えれば良いかを教えてあげたい。」[11]と述べている。

これらのことから，表１に示したポイントを基に，生徒と共に，授業ごとに意識したよさを反映させた図１の「見通しノート」を作成する。

表１　「見通しノート」作成のポイント

障害特性等	作成のポイント
目に見えない時間の流れが想像しにくい。	・時間の流れを上から下に構造化して示す。 ・提出物等の期日を書く欄を用意する。
目に見えない行動内容が想像しにくい。	・自分が終えた行動内容を視覚化するためのチェック欄を用意する。 ・行動内容を「やること表」等で例示する。
複数の仕事は難しい。	・行動内容は１枠につき一つとする。
書くなどの微細運動が苦手である。	・付箋を貼る。 ・枠を大きくする。
聴覚より視覚の方が情報を捉えやすい。	・聞き取ったことを視覚化するためのメモ欄を用意する。 ・指示内容を，言葉をなるべく抑え，イラストや記号で示す。
聞きながら学ぶより動作・操作を伴った学習方法が有効である。	・付箋を貼る。

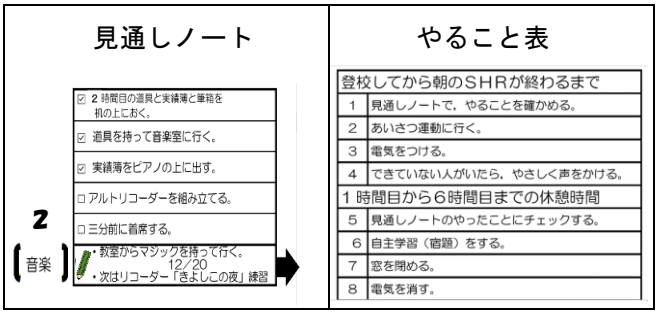

図１　「見通しノート」・「やること表」の一部

(2)「見通しノート」の活用

秋田県教育委員会（平成30年）は，日常生活の指導の指導上の留意点として，日常生活や学習の自然な流れに沿い，その活動を実際的で必然性のある状況下で取り組ませることにより，生活や学習の文脈に即した学習ができるようにすること，繰り返しながら取り組ませることにより習慣化していく指導の段階を経て，発展的な内容を取り扱うようにすることと示している。

「29年解説自立」では，自閉症のある幼児児童生徒の場合，特定の動作や行動に固執したり，同じ話を繰り返したりするなど，次の活動や場面を切り替えることが難しいことがある。本人が納得して次の活動に移ることができるように段階的に指導することが大切である。その際，特定の動作や行動を行ってもよい時間帯や回数をあらかじめ決めさせたり，自分で予定表を書いて確かめさせたりして見通しをもって落ち着いて取り組めるように指導することが

有効であると示されている。

本田（2018）は，「ある場所で学んだことを他の場で応用し，汎化することが苦手である。したがって，特殊な場で学んで持ち帰るスタイルの支援では限界がある。」[12]と述べている。

これらのことから，日常生活において，見通しをもって主体的に行動させるために，登校時から，休憩時間にやるべきことの進み具合を確認させ，帰りの会で振り返らせ，明日の目標につなげさせるために，「見通しノート」を活用させることが大切であると考える。「見通しノート」の活用が定着するように，毎日，帰りの会に振り返りの時間と翌日の計画を書く時間を設定する。また，「見通しノート」を般化させるために，学校生活を離れた家庭等での「冬休み版・見通しノート」を作成させる。これらのことが，実生活での見通しをもって行動する力を育むことができると考える。

３　見通しをもって主体的に行動することとキャリア教育との関連性

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成20年）は，職業的（進路）発達における諸能力の一つである「将来設計能力」の領域に関わるスキルとして，「職業や社会の中で自立した生活を送るために必要な役割遂行のスキル，及び職業生活に必要な習慣形成のためのスキルを身に付ける。」[13]と示している。また，中学部では「将来の職業生活に向けた習慣の基礎を形成する。」[14]と示している。さらに，「習慣形成」は，職場で働くための基礎的な力を身に付け，将来の職業生活の維持や発展のために必要な生活づくりの習慣形成を重視する観点であり，その際，自分の生活を自らよりよいものにしていこうとする姿勢や態度を育てることが大切であると示している。そして，職業生活に必要な習慣の一つとして，時間の管理やスケジュール管理を挙げ，例えば，産業現場等における実習中は，職場のスケジュールに合わせて，自分の生活を組み立てることが必要になると示している。

文部科学省（平成23年）は，「人間関係形成・社会形成能力」とは，今後の社会を積極的に形成することができる力であり，「自己理解・自己管理能力」とは，自分が「できること」「意義を感じること」について，自分自身の可能性を含む肯定的な理解を基に，主体的に行動し，自らの思考や感情を律し，今後の成長のために進んで学ぼうとする力であると示している。また，「課題対応能力」とは，様々な課題を発見・分析し，適切な計画を立ててその課題を処理し，解決することができる力であり，「キャリアプランニング能力」とは，様々な情報を適切に取捨選択･活用しながら,自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力であると示している。

これらのことから，本研究では，四つの能力の中の「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」及び「キャリアプランニング能力」を育成することが，見通しをもって主体的に行動する力を高めるために必要であると考える。

文部科学省（平成23年）は，「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の四つの能力によって構成される「基礎的・汎用的能力」を，「分野や職種にかかわらず，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力」[15]として示している。その具体的な要素を表２のように説明している。

表２　基礎的・汎用的能力の要素[16]

基礎的・汎用的能力	要　　素
人間関係形成・社会形成能力	他者の個性を理解する能力，他者に働きかける力，コミュニケーション・スキル，チームワーク，リーダーシップ等
自己理解・自己管理能力	自己の役割の理解，前向きに考える力，自己の動機付け，忍耐力，ストレスマネジメント，主体的行動等
課題対応能力	情報の理解・選択・処理等，本質の理解，原因の追究，課題発見，計画立案，実行力，評価・改善等
キャリアプランニング能力	学ぶこと・働くことの意義や役割の理解，多様性の理解，将来設計，選択，行動と改善等

このことについて，広島県立黒瀬特別支援学校（平成30年）は，キャリア教育の観点から実態を把握できるよう「育てたい力段階表」を，高槻市立第四中学校区（2015）は「平成26年度高槻市立第四中学校区キャリア教育全体計画」を作成している。

これらを参考とし，見通しをもって主体的に行動する力とキャリア教育における三つの能力に関連する項目を表３に整理する。

表３　見通しをもって主体的に行動する力とキャリア教育における三つの能力との関連

能力	項目	行動の内容
自己理解・自己管理能力	予定への対応	いつもと違う学校の予定を人に聞かなくても分かって行動できる。
	やり抜く力	自分で選んだことを最後までやり通す。
	準備と時間意識	給食当番，委員会，係などの役割を遅刻せずに行ってすることができる。
課題対応能力	選択	次の授業に向けてやることを選ぶことができる。
	評価	帰りの会などでその日にできなかったことを振り返ることができる。
	役に立つと思う	見通しノートは，役に立つと思う。
	必要性の認識	見通しノートをいつも持ち歩いている。
	確認	休憩時間や授業中に見通しノートを出して見ている。

	記録	見通しノートに必要なときメモをとっている。
	記憶	今日しようと思っていることを忘れないで過ごしている。
	用具の準備	休憩時間に授業で使う物を机の上に準備している。
	特別教室への準備	移動教室で教室に忘れ物をしていない。
	始まり	授業の始めに着席ができている。
	見通しと実行力	時間内にやるべきことを終わらせることができている。
	整理	授業の後すぐにロッカーに荷物をきれいに片付けている。
キャリアプランニング能力	改善	振り返ったことを次につなげるように気を付けている。

Ⅲ　研究の目的

本研究は，見通しをもつことに困難さのある自閉症のある生徒の主体的に行動する力を育むことを目的とする。

Ⅳ　研究の仮説及び検証の視点と方法

１　研究の仮説

「見通しノート」を活用すれば，見通しをもつことに困難さのある生徒の主体的に行動する力が育まれるであろう。

２　検証の視点と方法

検証の視点と方法について表４に示す。

表４　検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
見通しをもった主体的な行動をする力が高まったか。	・「学校での自分の過ごし方を振り返ってみよう。（生徒用）」 ・「見通しをもって主体的に行動する力についてのアンケート（教職員用）」 ・「見通しをもって主体的に行動する力についての行動観察」 ・「見通しノート」等への記述内容

(1) 生徒の実態

対象は，自閉症・情緒障害特別支援学級に所属する男子生徒１名，女子生徒１名とする。各生徒の実態を表５に示す。

表５　生徒の実態

生徒	実　　態
A	○次の活動に向けた段取りをイメージできず，概ね指示待ちだったり，何をすればよいか思い付かなかったりすることがある。 ○行動が遅く，間に合わないことが多い。 ○文章を書くときに自分の思いをどう書き表したらよいか分からず，読み書きの速度が遅い。 ○漢字の読み書きが苦手である。
B	○次の活動に向けて，今，何をすべきか考えて行動することはできるが，必要な行動を忘れてしまうことがある。 ○苦手なことを避けたり，最後までやりきることができなかったりする。 ○文章の書き出しをどうするか，迷うことがある。

(2) アンケート

アンケート及び行動観察は，表３を基に，所属校の生徒の実態に応じて作成し使用する。

○　実施日　事前　平成30年11月21日（教職員）
　　平成30年11月28日（生徒）
　　事後　平成31年１月11日（教職員・生徒）

○　対　象　所属校自閉症・情緒障害特別支援学級生徒５名
　　所属校教職員12名

○　表題及び問題数
・「学校での自分の過ごし方を振り返ってみよう。（生徒用）」16問
・「見通しをもって主体的に行動する力についてのアンケート（教職員用）」14問

○　分析の方法

生徒及び教職員の回答を表６のように分類する。数値は，高いほど，望ましいことを示す。研究授業前後の数値を比較する。

表６　数値表

回　答		数値
教　職　員	生　徒	
あてはまる	いつもできる	4
７割程度あてはまる	できるときもある	3
３割程度あてはまる	人に言われたらできる	2
あてはまらない	できない	1

(3) 行動観察

○　実施日　平成30年11月28日～平成30年11月30日
　　平成30年12月12日～平成30年12月21日
　　平成31年１月７日～平成31年１月11日

○　対　象　所属校自閉症・情緒障害特別支援学級生徒Ａ・生徒Ｂ　計２名

○　分析の方法

授業及び休憩時間の生徒の行動を観察し，行動を「行動観察」(14項目) に沿って４段階で記録する。

Ⅴ　研究授業

１　研究授業の内容

○　期　間　平成30年12月12日～平成30年12月20日

○　対　象　所属校自閉症・情緒障害特別支援学級生徒５名

○　領域名　日常生活の指導

○　題材名　「見通しをもって，安心して楽しく学校生活を送ろう」

○　目　標

・次の活動に向け行動内容を書くことができる。
・行動内容の順番を工夫して書くことができる。
・授業中の指示内容をメモすることができる。
・「見通しノート」に冬休みの生活について，書くことができる。

○　指導計画(全４時間)

次	時	学習活動	指導・支援
一	1	・ロールプレイを通して「次の活動に向けての行動を予測することのよさ」に気付く。 ・次の授業に向けた休憩時間の行動内容を,「見通しノート」に書く。	・情報機器を活用した視覚化 ・ロールプレイによる提示 ・ワークシートの活用 ・ワークシートの書き方例の提示
二	1	・ロールプレイを通して「すばやく無駄なく行動するための順番を工夫するよさ」に気付く。 ・休憩時間に行う行動内容を順番を工夫して「見通しノート」に書く。	・情報機器を活用した視覚化 ・動画の提示 ・ロールプレイによる提示 ・ワークシートの活用 ・ワークシートの書き方例の提示
	2	・ロールプレイを通して「忘れないようにするためのメモのよさ」に気付く。 ・休憩時間に行う行動内容を順番を工夫して「見通しノート」に書く。	
三	1	・「見通しノート」のポイントを生かして,「冬休み版・見通しノート」を書く。	・情報機器を活用した視覚化 ・動画の提示 ・ワークシートの活用 ・ワークシートの書き方例の提示

２　研究授業の実際

(1) 第一次

見通しをもって主体的に行動する力について，イメージしやすくするために，寓話「アリとキリギリス」を導入時に提示した。次に，「見通しノート」を活用して授業準備をする様子と，何もしない様子を，指導者によるロールプレイを通して比較させ，「次の活動に向けての行動を予測することのよさ」に気付かせた。その後，「見通しノート」に，次の日の授業に向けた行動内容を書かせた。

(2) 第二次

第１時では，前時の授業「次の活動に向けての行動を予測することのよさ」を電子黒板で振り返らせた後，ロールプレイを通して効率的でない行動を見せ，「すばやく無駄なく行動するための順番を工夫するよさ」に気付かせた。その後，次の日の行動内容を付箋に書かせ，並べ替える学習を行わせた。

第２時では，メモを取らずに授業の指示を聞いている様子を，ロールプレイを通して見せ，この後の展開を予想させ，「忘れないようにするためのメモのよさ」に気付かせた。その後，実際にメモするロールプレイを行わせた。

(3) 第三次

これまでの学習や休憩時間に，「見通しノート」を活用している様子を動画で振り返らせ，「見通しノート」の三つのよさを発表させた。それらを踏まえて，冬休みに自分がやりたい活動，それに向けての行動内容及びその順番を考えさせ，「冬休み版・見通しノート」に書かせた。

Ⅵ　結果と考察

１　アンケート及び行動観察

「学校での自分の過ごし方を振り返ってみよう。（生徒用）」と「見通しをもって主体的に行動する力についてのアンケート（教職員用）」の結果のうち，特に変容の見られた項目について，表７，表８，表９，表10に示す。

教職員の数値は教職員11名又は12名中の，各生徒について「１」「２」「３」「４」の評価を行った教職員の平均値を示す。

(1) 生徒Ａ

表７　生徒Ａの事前・事後アンケートにおける自己評価

項目	質問の内容	事前	事後
役に立つと思う	プランニングノートは役に立つと思う。	3	4
始まり	授業の始めに着席ができている。	2	3
見通しと実行力	時間内にやるべきことを終わらせることができる。	2	3
整理	授業の後すぐにロッカーに荷物をきれいに片付けている。	3	4
記憶	今日しようと思っていることを忘れないで過ごしている。	2	1

表８　生徒Ａの事前・事後アンケートにおける他者評価

項目	質問の内容	事前	事後
改善	振り返ったことを次につなげるように気を付けている。	2.8	3.0
整理	授業の後すぐにロッカーに荷物をきれいに片付けている。	3.5	3.8
見通しと実行力	時間内にやるべきことを終わらせている。	2.8	2.4

生徒Ａの自己評価では，キャリア教育の「課題対応能力」の「始まり」「見通しと実行力」「整理」が向上した。これらは，「見通しノート」を活用することで，次の活動への行動内容が明確になり，スムーズに，行動することができたからであると考える。また，「役に立つと思う」も向上しており，指示待ちが多かった生徒が自ら行動できたことで,「見通しノート」のよさを感じ，見通しをもって主体的に行動する力が育まれたと考える。

しかし，「記憶」は低下した。一度，「見通しノート」に記入してしまうと見直したり活用したりする意識がもちにくかったと考える。

また，「見通しと実行力」については，生徒Ａの自己評価は向上し，教職員による他者評価は低下しており，認識にずれがあった。周りからの継続した声掛けと，「見通しノート」で視覚化した行動内容を意識することで，体育科の授業等に慌てて走って行くことはできた。しかし，遅刻してしまい，実行するところまでできていなかった。キャリア教育の「キャリアプランニング能力」の「改善」は向上しており，振り返りを生かそうとする姿は見られた。

これらのことから，キャリア教育の「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に向上は見られたが，「自己理解・自己管理能力」に向上が見られなかった。自分を客観的に見ることの難しさがあるため，今後，自分が計画した行動内容を実行しようとしたり，主体的に行動したりする自分の姿に気付かせ，達成感を味わわせることが必要であると考える。

(2) 生徒Ｂ

表９　生徒Ｂの事前・事後アンケートにおける自己評価

項目	質問の内容	事前	事後
見通しと実行力	時間内にやるべきことを終わらせることができる。	3	4
やり抜く力	自分で選んだことを最後までやり通す。	1	4
改善	振り返ったことを次につなげるように気を付けている。	4	3

表10　生徒Ｂの事前・事後アンケートにおける他者評価

項目	質問の内容	事前	事後
改善	振り返ったことを次につなげるように気を付けている。	2.3	3.3
必要性の認識	プランニングノートをいつも持ち歩いている。	2.5	3.0
予定への対応	いつもと違う学校の予定を人に聞かなくても分かって行動している。	1.5	1.7
見通しと実行力	時間内にやるべきことを終わらせている。	2.8	2.4
やり抜く力	自分で選んだことを最後までやり通している。	3.3	2.8

生徒Ｂの自己評価は，キャリア教育の「自己理解・自己管理能力」の「やり抜く力」，「課題対応能力」の「見通しと実行力」が向上した。いつも必要な行動を忘れていたが，「見通しノート」に行動内容を書き，さらに，できた行動内容をチェックすることにより，忘れずやり抜くことができたと考える。やり抜き，達成感を味わったことにより，社会科等の授業で積極的に学習に取り組む姿が見られた。

しかし，教職員による他者評価の「見通しと実行力」「やり抜く力」は低下した。これらは，生徒Ｂの，「今日は遅刻したから『見通しノート』は見ない。」「好きな教科と苦手な教科によって意欲が変化しやすい。」という発言などから，自閉症の特性におけるこだわりによるものが関係していると考える。

教職員による他者評価では，キャリア教育の「自己理解・自己管理能力」の「予定への対応」，「課題対応能力」の「必要性の認識」及び「キャリアプランニング能力」の「改善」が向上した。これらは，「見通しノート」をチェックさせたり，毎回，振り返りを行わせたりしたことにより，生徒Ｂが「この前，こうだったから，次，こうなる。」というイメージをもち，スムーズに行動できたからであると考える。次の準備ができるようになったり，いつも忘れていたハンカチを持ってきたりするようになった。

しかし，生徒Ｂの自己評価の「改善」は低下した。これは，まだ，片付け等で支援を受けたり，声を掛けられたり，忘れ物について注意されたりしていることから，改善できていないと自己評価していると考える。

これらのことから，キャリア教育の三つの能力に向上が見られ，見通しをもって主体的に行動する力が育まれたと考える。

２　「見通しノート」の記述

生徒Ａ，Ｂの「見通しノート」の行動内容の記述を図２に示す。

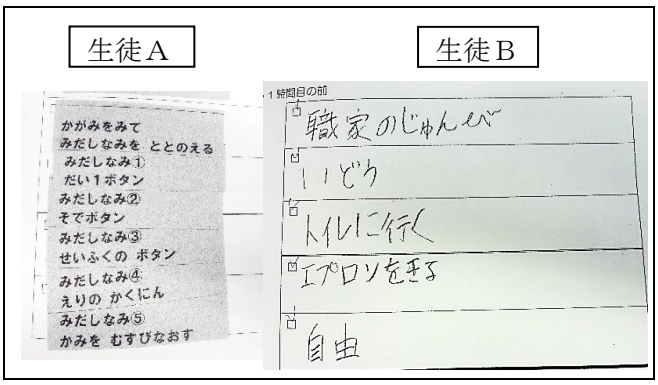

図２　生徒Ａ，Ｂの「見通しノート」

生徒Ａについては，初めの頃は，すでにできている行動だけを書いていた。しかし，必要とする身だしなみを整える行動内容を書くことができなかったため，必要とする行動内容を印字した付箋を使わせ，細かく分けて示させた。それまでは，身だしなみについて注意されることが多く，時間が掛かっていたが，自らきちんと複数の箇所のボタンを留め，髪を整えることができるようになった。

生徒Ｂについては，授業で学んだ「すばやく無駄なく行動するための順番を工夫するよさ」を意識し，「見通しノート」に授業の準備をすることを先に書

くようになり，実際にそのように行動できるようになってきた。また，すばやく行動すれば，自由な時間が確保できることに気付けた。このことにより「見通しノート」を活用するよさにも気付き，見通しをもって主体的に行動する力が育まれたと考える。

３　生徒の振り返り等の記述

生徒の「見通しノート」活用後の感想を表11に示す。

表11　生徒の「見通しノート」の活用後の感想

気付いたこと	
生徒Ｂ	・見通しをもつことが大事である。先のことを考えて先に準備をするとよい。 ・行動の順番を変えると効率がよい。 ・メモ欄には提出物，宿題，連絡及び持参物を書くことが分かったし，書くことができた。
良かったこと	
生徒Ａ	・行動内容を漢字で書かずに付箋を貼るだけだったこと。
生徒Ｂ	・教室外の場所でも次の行動内容を確認できた。新しく考えなくても「やること表」に例があるから良かった。だからあまり面倒くさくなかった。分かりやすく書きやすかった。 ・冬休みの放課後等デイサービスで，勉強をする前，一度鞄をロッカーに片付けなかったけど後の行動内容は全部できた。この日以外は続けてできた。
困ったこと	
生徒Ａ	・行動内容を印字した付箋がなくなったので計画が立てられず困った。
これからしようと思うこと	
生徒Ｂ	・これからのことを考え，頭に入れて何かに書き出そうと思う。

生徒Ａについては，漢字等の文字を書くことに抵抗があったため，行動内容を印字した付箋を活用させることが，より効果的だったと考える。

生徒Ｂについては，行動内容を考えることが難しかったため，「やること表」で行動内容の例を示したことにより，行動内容を考えることの負担を軽減することができたと考える。また，「冬休み版・見通しノート」を活用させたことにより，今後も次の活動に向けた行動内容を意識しようという意欲が高まったと考える。

Ⅶ　研究のまとめ

１　研究の成果

○　自閉症の特性のある生徒に，次の活動に向けての行動内容を構造化・視覚化等の工夫をして考えさせることは，見通しをもって主体的に行動する力を育む上で有効であることが分かった。

○　見通しをもつことのよさを内面的に理解させるために，ロールプレイを通して体験的に学習することが有効であることが分かった。

２　研究の課題

○　実際の日常生活の中で，生徒が「見通しノート」を確認する場面が少なかった。教職員及び保護者と連携し，いつ，どのように，どれくらい「見通しノート」を確認するかを具体的に示し，友だち同士で声掛けをさせる仕組みが必要である。

○　「見通しノート」において，個によって記入及び活用の仕方に差があったため，生徒の実態に応じて，作成し，柔軟に対応していく必要がある。

【引用文献】

1)　中央教育審議会（平成23年）:『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』p. 16
2)　中央教育審議会（平成23年）：前掲書p. 19
3)　中央教育審議会（平成23年）：前掲書p. 39
4)　三苫由紀雄（2014）：「４　教育・支援の基本的な考え方」『自閉症スペクトラム児の教育と支援』東洋館出版社p. 50
5)　J.A.ナグリエリ・E.B.ピカリング（2010）：『DN-CASによる子どもの学習支援-PASS理論を指導に活かす49のアイデアー』日本文化科学社p. 8
6)　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成20年a）：『自閉症教育実践マスターブックーキーポイントが未来をひらくー』ジアース教育新社p. 5
7)　三苫由紀雄（2014）：前掲書p. 53
8)　霜田浩信（2014）：「１　中学生段階の特性」『自閉症スペクトラム児の教育と支援』東洋館出版社p. 123
9)　三苫由紀雄（2014）：前掲書p. 53
10)　本田秀夫（2018）:「自閉スペクトラム症の理解と支援」『特別支援教育研究　第734号／10月号』東洋館出版社p. 2
11)　霜田浩信（2018）：「自閉スペクトラム症の児童生徒一人一人に対応した指導と教育的配慮」『特別支援教育研究第734号／10月号』東洋館出版社p. 9
12)　本田秀夫（2018）：前掲書p. 5
13)　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成20年b）：『平成18・19年度　課題別研究　報告書　知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究』p. 48
14)　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成20年b）：前掲書p. 57
15)　文部科学省（平成23年）：『中学校キャリア教育の手引き』教育出版p. 21
16)　文部科学省（平成23年）：前掲書p. 22

【参考文献】

安住ゆう子（2014）：『子どもの発達が気になるときに読む心理検査入門－特性にあわせた支援のために－』合同出版
文部科学省（平成30年）：『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）』開隆堂出版
日本自閉症スペクトラム学会（2005）：『自閉症スペクトラム児・者の理解と支援－医療・教育・福祉・心理・アセスメントの基礎知識－』教育出版
安住ゆう子・鈴木弦・芳賀亮一・藤村愛・三島節子（2017）：『体験しながら育もう実行機能力ステップアップワークシートー自立に向けてのアイテム10－』かもがわ出版
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成23年）:『特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブックーキャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善，個別の教育支援計画に基づく支援の充実のために－』ジアース教育新社
秋田県教育委員会（平成30年）：『特別支援学校日常生活の指導ガイド』https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/3275
広島県立黒瀬特別支援学校（平成30年）：『平成29年度研究紀要』https://www.kurose-sh.hiroshima-c.ed.jp
高槻市立赤大路小学校・富田小学校・第四中学校（2015）：『ゼロからはじめる小中一貫キャリア教育－大阪府高槻市立第四中学校区「ゆめみらい学園」の軌跡－』実業之日本社